

平成19年から京都大学の先生と協力し、九十九島のクラゲについての研究、報告を行っています。
海きららでは、九十九島周辺に生息するクラゲの生態解明のため、これからもこの研究を継続していく予定です。



クラゲ天国の九十九島

京都大学フィールド科学教育研究センター
瀬戸臨海実験所准教授

久保田 信 Shin Kubota



九十九島周辺海域は多島海の風光明媚な西海国立公園となっており、豊かな環境に多彩な海洋生物が生息しており、それらの多くが九十九島水族館で飼育展示されている。この海域には、とりわけ様々なクラゲ類が生息していることが近年、よく知られるようになってきている。

九十九島水族館周辺海域では2006年(平成18年)から2013年3月現在に至るまでの7年間、毎月色々な調査方法でクラゲ類の採集・飼育・研究がなされてきた。研究当初からのリーダーである秋山仁氏によると、「116既知種が確認されている他に、もう100種ほどが生息している可能性がある」という。つまり、合計で少なくとも200種のクラゲ類が四季折々みられるというのである。ということは我が国随一のクラゲ天国の海となる。

国内でクラゲ類が最多種記録されている所は和歌山県田辺湾で、150種余りである。田辺湾口に所在する京都大学瀬戸臨海実験所の歴代所員が、創立の1922年(大正11年)以来、クラゲ類の研究も実施してきており、この1世紀ほどの研究の蓄積によるものである。著者もそこに21年間勤務し、この方面の研究にいそしんでいる。この息の長さとは比べて、たった7年間で九十九島周辺海域ではそれよりも50種も新たに記録されたというから、驚くべき結果となる。

両海域は暖流の影響を受ける温帯地域に当たるので、多くの共通種が生息している。しかし、亜熱帯・熱帯性のクラゲ類でこれまで南西諸島でしか見られなかった種が九十九島周辺海域から続々と発見されており注目に値する所となっている。正式に学会に公表されたものとして、たとえばクビレケリカークラゲが挙げられる。この小型のヒドロクラゲ類は著者が鹿児島県口永部島でたった一度、1個体だけ採集して以来、著者の南西諸島を含む各地での長年の調査でも日本のどこからも再発見されてこなかったが、九十九島周辺海域で次々と複数個体が発見された。

このような稀少種の発見は他にも多々あって、たとえば大型のクシクラゲ類であるキヨヒメクラゲ(クシクラゲ類に所属)は、和歌山県田辺湾からのみ数個体が古くに報告されていただけであったが、九十九島周辺海域では最近、決まって毎冬に出現し、その飼育展示が世界で初めてなされて一般公開されているのは周知のとおりである。勿論、学会に報告もされている。

最も注目すべきことは、世界で九十九島周辺海域だけでしか発見されていないクラゲが生息していることである。それは、2013年8月に和名がワタゲクラゲと命名されて正式に新種公表され、一般の方々に対しても2013年9月から飼育展示公開となったばかりである。ワタゲクラゲの若い時代であるポリプも飼育努力により九十九島水族館の裏方(クラゲ研究室)で生きており、「周年飼育している」とのことで、この種の生活史も学会にいずれ近いうちに公表されるであろう。是非とも、新種の生きた保管を継続して頂きたい。

このことは世界から注目を受けるであろうし、色々な問い合わせも多くなるであろう。それと同時に、今後も次々と飼育展示に加えて、逐一、研究公表を正式にして頂きたい。何年にかかる息の長いことになるかもしれないが、その暁には、文字通り、日本一のクラゲ天国の海となり、目を見張る九十九島周辺海域産のクラゲの多様性が日本に留まらず、世界に広がってゆくであろう。



ワタゲクラゲ

「海きらら」では、国内の大学と連携し、生きものの研究を行っております。
どのような研究を行っているのか、次号でも紹介します。どうぞお楽しみに!!